

記 録

岡山県におけるヤマコウモリ（翼手目，ヒナコウモリ科） の確認記録について

岡山市 山田 勝*

赤磐市 渋谷 陽子

岡山市 松崎 理恵

Records of *Nyctalus aviator* Thomas, 1911(Chiroptera, Vespertilionidae) in Okayama Prefecture

Masaru YAMADA, Okayama-city

Yoko SIBUYA, Akaiwa-city

and

Rie MATSUZAKI, Okayama-city

キーワード：ねぐら，岡山県，市街地，ヤマコウモリ，人工構造物.

はじめに

ヤマコウモリ *Nyctalus aviator* Thomas, 1911 は，国内では北海道，本州，四国，九州，対馬，壱岐島，福江島，沖縄島から記録があるヒナコウモリ科のコウモリである。

本種の昼間の隠れ家は樹洞で，日没後にそこから飛び出す。一晩中，飛翔する昆虫類を捕食し，日の出前に隠れ家に帰る（前田，2005）。また，別の記述によると，本種はおもに樹洞をねぐらとするが，まれに小鳥用巣箱や人家からも見つかる。ねぐらは市街地から森林までさまざまな環境で見つかっているが，大木の例が多い。日本の食虫性コウモリの中では最大で翼を広げると40cmに達し，日没前後の比較的明るい時間帯にねぐらから飛び出し，開けた空間を高速で飛翔するとされる（福井，2011）。

岡山県内での本種の記録は，前田（1984）により，総社市で1967年9月24日に雌1個体が採集者不明として報告されている。それ以外に確実な記

録があるかどうかは定かではないが，今日まで本種の記録が極めて少ないことは確実であり，岡山県野生生物目録2009（岡山県，2009）にも記載はない。今回，筆者らは岡山県南東部で複数のヤマコウモリを確認することができたので，確認概要を報告することとした。なお，本種は環境省レッドリスト（環境省自然環境局野生生物課，2007）において，準絶滅危惧（NT）に指定されており，全国的にも絶滅が危惧されている。

調査概要と周辺環境

筆者らは，2011年7月9日と2011年11月12日の2回にわたって図1に示した場所に位置する「赤磐市くまやまふれあいセンター」1階の建屋内機械室で合計9個体のヤマコウモリを確認した。確認された個体については，性別，前腕長，頭胴長，体重を記録し，写真撮影も行った。なお，捕獲については岡山県の捕獲許可（平成23年度 第10-6-2号）を得て行った。

調査概要を表1に示す。当施設周辺の環境は水田と小高い山に囲まれ，南に一級河川である吉井川が流れており，その対岸には熊山という標高約

*連絡先：m-s-yamada@mx31.tiki.ne.jp

500mの山塊がある。直近は、民家、旧熊山町役場、市民病院などの公共建物や、商業施設などの集積が見られる市街地であり、標高は約16mであった。



図1. ヤマコウモリの確認地点(旧市町村で示す)。

1. 2011年7月9日（1回目）の確認状況

2011年7月9日に赤磐市立熊山公民館職員から、「映画会を催すとホール内で大きなコウモリがたびたび飛翔する。」との情報を得て当地を案内していただいた。舞台脇の機械室を開けて入室したところ、コンクリート床面へ乾燥して半ミイラ化したコウモリ類の死体4個体が認められた。部屋にはその死体から発生したと思われる腐敗臭が漂っていた。

そのコウモリ類は、一見して大型で光沢のある

濃い褐色系の体毛に覆われていた。死後硬直等による誤差が少ないと思われる前腕長を計測したところ、どの個体も60mm以上であった。南西諸島や小笠原諸島などに生息するオオコウモリ類を除くと国内で記録があるコウモリ類の中で前腕長が60mm以上を有する種は、カグラコウモリ *Hipposideros turpis*、キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum*、オヒキコウモリ *Tadarida insignis*、ヤマコウモリに絞られる。当個体は、カグラコウモリやキクガシラコウモリに見られるような特徴的な鼻葉が確認できないこと、オヒキコウモリに見られるように尾端が腿間膜より著しく突出するという特徴が確認できないことから判断して、ヤマコウモリと同定された。前田（2005）によると本種の外部形態は、前腕長57~66mm、頭胴長89~113mm、体重35~60g、光沢のある濃い褐色系の体毛をもつと記載されている。体毛と前腕長はすべての個体についてその記述と合致していた。しかし、頭胴長と体重は記述の値を下回っており、死後の硬直や乾燥化による影響で減少したものと推測された。念のため頭骨標本も1個体作製し、阿部（2003）の記述と比較したところヤマコウモリの特徴に合致していることが確認された。また、陰茎の有無および伸長状況から判断して4個体のうち2個体が雄、2個体が雌と判断された。なお、本個体の標本については、江木寿男氏宅、川口 敏氏宅、倉敷市立自然史博物館、学校法人加計学園岡山理科大学に保管されている。

表1. ヤマコウモリの調査概要一覧表。

確認年月日	時刻	天候	確認場所	標高 (m)	確認 個体数	性別 ♂♀	前腕長 (mm)	頭胴長 (mm)	体重 (g)	特記事項
2011/7/9	12:10	晴れ	岡山県赤磐市松木 「赤磐市くまやまふれあい センター」1階機械室	16	4	1	62.1	83.0	12.5	半ミイラ化
						1	62.2	80.2	15.0	半ミイラ化
						1	62.5	82.7	14.0	半ミイラ化
						1	62.3	83.2	17.0	半ミイラ化
2011/11/12	10:00	晴れ	岡山県赤磐市松木 「赤磐市くまやまふれあい センター」1階機械室	16	5	1	-	-	-	衰弱していたが自力回復
						1	-	-	-	衰弱していたが自力回復
						1	61.2	88.7	22.5	半ミイラ化
						1	62.9	93.9	28.0	半ミイラ化
						1	62.8	85.1	8.5	半ミイラ化
合計				-	9	4 5	-	-	-	-

2. 2011年11月12日(2回目)の確認状況

11月11日20時ころ、赤磐市立熊山公民館職員が7月9日に確認されたと同じ機械室へ翌日の行事開催の準備に向け入室したところ、計5個体のコウモリ類を発見した。うち2個体は衰弱しているもののわずかに動いており、まだ生存していた。

翌11月12日、筆者の一人である山田が訪れたところ7月9日に確認された個体と同じ特徴を有しており、すべてヤマコウモリであることが確認された。5個体のうち2個体が雄、3個体が雌と判断された。生存していた2個体(雄1個体、雌1個体)については写真撮影後、少しでも体温を上げるため綿製軍手の中へ入れ、日当たりの良い車のボンネット上へ置いた。約15分後に様子を見に行った時点でその姿は認められなかった。2個体とも体力を回復し自力で飛翔していったものと推測された。なお、この時すでに死亡していた3個体の標本については、筆者の一人である山田が保管している。

まとめ

筆者らは、2007年頃から主に県北部を中心に森林内の樹洞や樹皮下を調べてきたが、本種を発見することはできなかった。今回、公民館スタッフとの何気ない会話の中から本種が県南部の人工構造物を利用していることが判明したことは大変興味深く、地元住民から寄せられる情報も大切にすべきと改めて痛感した。

今回の報告では、7月9日に雄2個体、雌2個体、11月12日雄2個体、雌3個体と、ほぼ同数の雌雄が認められた。建屋内をくまなく探索したものの、繁殖に関する形跡は認められなかった。本種は6月から8月にかけて、メスは数十～百頭以上からなる出産哺育コロニーを形成し、秋～冬にかけては雌雄混成集団を形成するとされる(福井, 2011)。このことから、本種は当地を出産哺育コロニーとしては利用しておらず、秋～冬にかけて雌雄混成集団が形成されてから休息・越冬場所として利用しているものと推測された。今回、確認個体のいくつかが落獣した原因については定かではないが、一旦建屋内へ侵入したものの出口を見失い、死亡に至ったのでないかと考えられた。

岡山県内における本種の生態についてははまだま

だ未解明な部分が多く、繁殖状況等についても全く不明である。今後とも当地における調査を継続するとともに、県内における新産地や生態的知見等を明らかにしたいと考えている。

本種は、この30年間の間に限ってみるとごく一部の地域を除くと個体数が激減しているといわれている(前田, 2005)。今回得られたわずかなデータと事象にもとづいて、保全についての適切かつ具体的な提案をすることはできないが、近隣の森林伐採による林相変化や営巣木となりそうな大径木の減少や河川改修などの環境改変は、コウモリ類の休息場所を減少させたり、昆虫などの餌動物を減少させたりなどの影響を与えると思われる。当地周辺で環境改変を行う際には、可能な限り本種の生息に配慮した施策を期待したい。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、たびたび現地へ入らせていただき、本種の確認につながる情報をいただいた赤磐市立熊山公民館の職員の方々、頭骨による同定と標本を保管していただいている香川県さぬき市在住の川口 敏氏、文章の校正と標本の保管をしていただいている矢掛町在住の江木寿男氏、コウモリ類全般にわたって多くの文献情報や具体的なお教授をいただいた株式会社ウエスコの森分泰三郎氏、日本国内のヤマコウモリについて生息情報をいただいた埼玉県入間市在住の重昆達也氏、標本を保管していただいた倉敷市立自然史博物館、学校法人加計学園岡山理科大学の関係者、捕獲許可に際して便宜を図っていただいた岡山県環境文化部自然環境課の福島慎介氏に感謝の意を表するとともに記して深くお礼申しあげる。

引用文献

- 阿部 永, 2003. 日本産哺乳類頭骨図説. 279pp. 北海道大学図書出版会, 札幌.
- 福井 大, 2011. ヤマコウモリ. コウモリ識別ハンドブック改訂版. 30-31. 文一総合出版, 東京.
- 環境省自然環境局野生生物課, 2007. 哺乳類, 汽水・淡水魚類, 昆虫類, 貝類, 植物 I 及び植物 II のレッドリストの見直しについて. (平成19年8月3日: 環境省発表資料: <http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8648>)

前田喜四雄, 1984. 日本産翼手目の採集記録(I).
哺乳類科学 (49) : 55-78.
前田喜四雄, 2005. ヤマコウモリ. 日本の哺乳類
(改訂版). 50. 東海大学出版会, 泰野.

岡山県生活環境部自然環境課, 2009. 岡山県野生
生物目録2009. 379pp. 岡山県生活環境部自然
環境課, 岡山.



写真1. ヤマコウモリの確認された建物と周辺環境（赤磐市松木, 2011年7月9日）.



写真2. 「赤磐市くまやまふれあいセンター」
(2011年7月10日).



写真3. 「赤磐市くまやまふれあいセンター」西
面（矢印奥の1階機械室で合計9個体のヤマ
コウモリの落獣が確認された. 2011年7月10
日）.



写真4. ヤマコウモリの落獣個体（1階機械室左
奥コンクリート床面へ2個体. 2011年7月9
日）.



写真5. ヤマコウモリの落獣個体（1階機械室右
奥コンクリート床面へ2個体, 2011年7月9
日）.



写真6. 半ミイラ化した4個体のヤマコウモリ(背面, 2011年7月9日).



写真9. 前腕長は計測したすべての個体が60mmを越える (2011年11月12日).



写真7. 陰茎の認められる雄2個体と雌2個体(腹面, 2011年7月9日).



写真10. 半ミイラ化したヤマコウモリ (2011年7月9日).



写真8. 顕著な陰茎が認められるヤマコウモリの雄個体 (2011年7月9日).



写真11. 半ミイラ化したヤマコウモリ (濃い褐色系の体毛に覆われている, 2011年7月9日).



写真12. ヤマコウモリの落獣個体（5個体のうち矢印の2個体はかろうじて生きていた，2011年11月12日）.



写真14. 5個体のうち3個体はすでに半ミイラ化していた（2011年11月12日）.



写真15. ヤマコウモリの雄個体（2011年11月12日）.



写真13. 衰弱していた2個体（奥側：雌，手前：雄，2011年11月12日）.



写真16. ヤマコウモリの雌個体（2011年11月12日）.